



永久の旅 2



どんなに格好悪くても
生きろ

琥珀

1, 旅の途中

あっつい・・・・・・・・・・。

この前の春にも、砂漠で迷子になって「あつい」って言ったけど、今回の暑さはそんなに生やさしくない。なにせ、今のシーズンは夏！砂漠にでもいたら、いまごろ干物だね。

でも、今回はそんなヘマしなかった。いま僕たちがいるのは、サラム国の、リーノ街。海に面していて、貿易が盛んで、すごくにぎやかで、遊びに来るにも適しているから、この時期になると観光客がたくさんやってくる。その観光客目当てに、道では屋台が並び、店の値段もみょうにつりあがる。

そんなリーノ街じゃ、夏だろうが、冬だろうが、関係ない。だって、この人ごみの量。夏なら、灼熱の太陽の上にこの熱気だから、干物というよりは、蒸し焼きになりそう。冬なら、おしくらまんじゅうみたいで、けっこうあたたかい。ただし、どちらでも共通する点がひとつ。靴がボロボロになること。つまり、足を踏まれまくるんだ。もちろん、悪意があるわけじゃない、はずなんだけど。これだけの人だから、ひとりひとりに構ってられないんだろう。

あ、いて。また踏まれた。謝るぐらいしてくれてもいいよね！？田舎じゃ、足を踏んで無視するとか、どんなに性格の悪いやつ（第一、田舎はめちゃくちゃのどかで、嫌な奴も少ないほう）でも、「ごめん」ぐらいは行っていく。旅を続けて、もう1年ぐらいたつけど、やっぱり都会って分からないな。

「シャラ。おれ、ちょっとバイト探してくるからさ。宿なら予約してあるから、そこで待っててくれ」

兄さんが、地図をはしり書きしてある紙をヒラヒラとふって、僕によこした。

僕の兄さん、ディオル。3つ年上で、ぼくよりずっと美形。だから、旅の途中でも、よく告白されているのを見ちゃったことがある。でも、兄さんは全部断ってきた。

「ああいうのに付き合ったら、絶対におれたちの金の方がすり減る。それだけは、こまる」

兄さん曰く、そういうことらしい。都会もだけど、兄さんぐらいの年の世界もわからない。

ま、話を戻すと。兄さんは旅の先々でバイトを探して、働く。出来たら僕も一緒に働いて、お金の問題を改善したいんだけど、年が足りない。ごまかそうにも、背もあまり高くない。兄さんがどんなバイトをしようが、食べさせてもらっている立場だから、文句は言えない。身の程っていうのは僕だってわかっているつもり。

それにしても兄さん、ほんとうにいろんなバイトをやってきたんだよ。レストランの皿洗いはもちろん、配達会社の倉庫担当、出前、バーのバーテンダーの臨時・・・・・・・・。数え切れないな。

どんなバイトをしても、上司がどんな人でも、兄さんは気に入られていた。カッコいいし、体力もあるし、上辺だけでものスマイルが、女の人にはたまらなくて、商品がバンバン売れていくから。にこり、と笑いかけたら、レストランで働いていた時なら、追加注文が入り、服屋で笑うと、ちょっと高めの服が飛ぶように売れていく。バーで働いていたら、未成年っていうことでお酒は飲まないけど、女の人や男の人たちのグチに付き合い、女の人にスマイル、男の人には笑

顔のあとに、びしっと気合で一発いうと、さらにお酒の追加注文が！

恐るべし、ディオルスマイル・・・・・・・・。

兄さんのスマイルは、最強だ。一度か二度、大きめの街で、兄さんがモデルとしてスカウトされたことがあった。あのときは、僕も兄さんも、驚いた。だって、最近女の子に人気だっていう雑誌の「ニコ7」だったか、そんな名前の雑誌にスカウトされたんだ、僕の兄さんは。すごすぎるよね。弟としても、驚きだよ。世の中って、そういうもんなのかな？

とにかく。だから、今の僕たちのを支えているのは、唯一、兄さんのバイト代のみ。だから、そのお金を管理する僕としては、食費なんかを考えると、ほぼ毎日、野宿！に、なるはずだったんだけど・・・・・・・・。

運がよく、今年の春に助けたお姫様（実際に助けたのは兄さんで、僕は助けられる立場だったんだけど）の国が、もうとにかく景気がよくて、お礼にってことで、お金をたくさんもらった。それに、もらったお金はすぐさま貯金したから、ほとんど使っていない。ふっふっふっ。つまり、現在の僕たちは、けっこうリッチなんだ。ありがたいよね、お金って。かといって、油断しちゃだめなんだ。お金ほど、手に入れるのがしんどくて、失うのが簡単なものはないからね。

「さてと」

そうって僕は兄さんが渡してくれたメモを確認してから、宿を探した。

たくさん屋台が出ている。いろんなキャラバン（商隊）が店を出していて、たくさんの方が行きかっている。すごいなあ。ああ、めちゃくちゃいいにおいがする。

お金・・・・・・・・。持ってるけど…………。・・・・・・・・。

ハッ！

危なかった！食欲に負けそうだった！油断大敵。

1人でうなずいていると、ふと広告パネルが目にとまった。

『西の峠に魔女現る。汽車運行中止』

・・・・・・・・。西の峠。汽車運行中止。

西の峠って、ボク達の行きたかったところなんですけど。もしかして、そのこと？

「うっそお！」

思わず声に出たよ。何人もの人がボクを見た。

でもそのときはそんなこと、気にも留めなかった。

西の峠を越える方法は汽車しかない。僕たちの行きたい町には、西の峠を越えないといけない。こんなことになったら、どうしようもないよ。

ってというか、誰なんだよ魔女って！？迷惑な話だよ、まったく！

「あの、すみません！」

ボクは、近くにいたおばあさんに声をかけた。

「この『魔女』ってだれなんですか？」

「ああ、これかい」

するとおばあさんはいきなり暗い声になった。

「この魔女って言うのはね、何年ごとに西の峠に現れては生け贄を求めるのさ。そして、生け贄

が出るまではずっと悪さを続ける。子どもをさらったり、畑を全滅させたり、数軒分の家畜を殺してしまったりね」

うわ～。やっぱり評判最悪だよ、魔女。

「その生け贄って、どうやって決まるんですか」

「まあ、いろいろだね。村の中から町長が指名したり、みんなのためにと立候補するものがない。出来るだけ若者がいいらしいが、若者は働き手なんだから困ったもんだよ」

「そうなんだ……。ありがとうございます、教えてもらって」

そうって、ボクはその場を後にした。

生け贄。なんかいやだな～。そういうの。

ま、兄さんの帰りを待ちますか。

2, 生け贄は誰？

「生け贄だああ！？」

帰ってきて早々そんな話を聞き、俺は思わずそんな大声を出してしまった。

「そんな声ださないでよ、兄さん」

「え、いや。ごめん」

一応謝ってから、改めていすに座りなおした。

「で。その生け贄って奴がでないと道も通れない、と」

「うん」

「ふうん……」

……。

「兄さん。自分になろうか、とか思ってるだろ」

ギクッ！！

「何考えてんだよ！そんなことやらせないよ！絶対にダメだからね！！」

「いや、そんなに怒るなよ」

「怒るに決まってるだろ！！兄さんだったら、人のためにそういうことやりかねないし！っていうか、兄さんがいなくなったらボクにどうしろっていうんだよ！？」

シャラの言葉を最後に沈黙が続いた。

「もっと、残された人のこと考えてよ」

そういうとシャラは上着を取って外に出た。

「ちょっ、待てよ」

俺も急いで後を追った。

あの誘拐事件から、シャラを1人にさせないようにしている。

あいつはヒョロヒョロだから、狙いやすいんだろうな。もうちょっと鍛えればいいのに。

☆

夜の市場では、昼間よりもにぎわっていた。

さまざまな出し物がされていた。踊りや、手品。歌や劇。たくさんの美しい明かりで、高いところから見たら町が星空のようだと思う。

シャラは……。

「な、なあシャラ。あの料理……おいしそうだよ、なあ？」

「……そうだね」

不機嫌です。

あ一面倒くせえ。ここまで向き合ったの初めてだけど、こんなにこいつ面倒くさかったっけな。

「……あ！シャラ、アレ見ろよ！」

アレっていうのは、異民族の伝統舞踊だった。なんていう名前なのかは知らないけれど、たくさんの宝石と鎖と長い三つ綱（その民族の伝統なのか、全員長い髪を何本かの細い三つ綱にしていた）が振り乱れて、すごくきれいだった。

シャラは、こういう伝統とかが大好きだった。しょっちゅう外で遊んで泥まみれになって帰ってくる俺と違って、シャラは家の中にある物語や伝説の分厚い本や伝統民族の本を何度も読み返していた。

これで機嫌直すだろ！！

「わああっ・・・・・・・・」

シャラはさっきまでの顔から一変し、輝いた目で踊りを見始めた。

どうよ、この情報操作能力。

シャラの機嫌も直ったことだし、俺もゆっくり踊りを見物するか。

にしても、本当にきれいだな。

特に真ん中の女の子なんて、すごく軽やかで浮いてるんじゃないかってぐらいだった。赤い髪を左右の高い位置から三つ綱にしている残りの髪はほどいたままで、一人だけ生花もつけていた。劇団内でも、よっぽど大切にされているんだと思う。

目が合った。

目は、夕焼けみたいな色だった。透き通っていて、そこもきれいだった。

「シャラ、そろそろ行く・・・・・・・・」

いない。

「あれ？シャラー？」

読んだが、返事もしない。

また誘拐されたのか？油断もすきもないな。

っていうか、だから鍛えろって言ってるんだよ。あんなヒョロヒョロのチビ助じゃ、誰でも誘拐対象にするっての。っていうか、早めに見つけないとな。

この町では魔女の現れる時期になると、適当なやつ捕まえて町長にうけわたし、金を稼ぐなんていうやつも少なからずいるそうだ。

あーやだやだ。こういうの、ホントいやだよな。

「シャラ！シャラ！！」

必死になって探し回った。

すれ違う人が、俺のことをちらちら見ていく。祭りの中で1人だけ必死に何かを探しているんだから、そりゃ注目するだろ。

「あの」

声をかけられた。

「なんだ？」

振り返ると、そこに立っていたのはあの踊り子の女の子だった。俺の目線ぐらいの背の高さで、もう衣装ではなく普通の服を着ていた。

「あの男の子を捜しているんですか？」

夕焼け色の目が、俺の方を見つめた。

「そうけど………。もしかして、どこいったか知ってるの!？」

「はい。舞台の上から見えてましたから」

「じゃあ何でそのとき止めてくれなかったの!？」

「どこ!？」

今は文句は言わずに、ただ居場所を聞いた。

「こっちです」

女の子は走り出した。

「そういえば君、名前は!？」

「……アミーラ・ヤークートといいます」

*☆☆

突然だったんだ。

踊りを見ていて、油断していた。キラキラした宝石をまとった踊り子さんに見とれている隙に、口を押さえられて人混みに引きずり込まれた。

目隠しされて、袋に入れられたらしい。

「あのガキ……ですか？」

袋の外からかすかな声が聞こえてくる。

「町長に差し出せば大金が手に入る。これほど上手い話は無いぜ」

え？

え、ちょ。差し出すって……、ボク!？」

「どうしよう。町長に差し出すって。」

兄さんに聞かされたんだ。この町の、こういう時期に表れる生け贄狩りの人たちのこと。まさかその対象が自分になるなんて、思ってもみなかったんだ。

どうやって逃げ出そう。手足は縛られている。袋の中に入れられていて、外の状況はわからない。袋に穴が開いていたとしても、目隠しという二重構造でどうしようもない。口もふさがれている。

手足だけでも何とかしたいけど、縄抜けとかやったことないし。

「そろそろいきますか」

えっ! ちょっと待ってよ!

行きたくないよ! 生け贄になんかなりたくない!!

父さんと母さんに会うまでは!!

「おい、あんたらあ!!」

あれ、この声は。

「その袋の中、何が入ってるんだ!？」

兄さん!

ボクは袋の中で出来る限り暴れた。外で、「あっ、こいつ……!」とつぶやく声が聞

こえた。

「そのなかにいるやつ、俺の弟なんだよ。返してもらおうか！」

「無理だ！俺達だって、金に困ってるんだ。この仕事さえすれば、大量の金を……」
ドゴッ！！

鈍い音が聞こえた。

「ふざけんな！！人と金を並べんじゃねえ！！」

その瞬間に、袋をつかんでいた人が放してしまったりしく、地面に放り投げられた。

「ぐっ。いっ……」

手足を縛られていたから受身も取れなくて、肩から落ちた。

「シャラ！大丈夫か！？」

袋から出されて、目と口の布を外してもらった。まぶしくて、空気がおいしく感じた。

「大丈夫か？けがとかないか！？」

手足のロープも切ってくれた。きつく結びすぎて、痕がついていた。

「おい、お前。そっちの背の高いほうのお前だ！！」

兄さんは、ギロリと男の人を睨んだ。

こんな兄さん、はじめて見た。起こることは何度もあったけど、ここまでじゃなかった。

こういうのを、殺気っていうんだろうか。

「責任を取れ！！そいつを逃がすんだったら、お前が身代わりになれ！」

責任？なんの？

っていうか、こんなことでお金を稼ぐくらいなら職を探せ！

「というか、自分がポケットとしていたから弟がさらわれたんだろ？」

さっきまで平然としていた兄さんの目の色が変わった。

「弟さんに責任取らなくちゃいけないんじゃないの～？」

男の人は、ヘンな口調でそんなことを言い出した。

「兄さん、そんなことないよ。ボクが悪いんだ。ボクが、油断してたから。っていうか、あの人たちがボクを誘拐なんかするから……」

急いでささやいたけど、兄さんはすごい思いつめたかんじの顔をしていた。

「答えは明日まで待つてやるよ。必ず、明日までに返事をよこすんだぞ」

そういいはなって、2人の男組みは夜の闇に消えていった。

兄さんは、相変わらず1点を見つめ続けている。

「兄さん」

声をかけた。兄さんは気づかないのか無視しているのか、反応しない。

「兄さん！」

ビクッ！兄さんはやっと反応してくれた。

目は、まだ落ち着いていない。

「もう……宿に帰ろうよ」

そうって、ボクたちは宿に戻った。

「兄さん」

「・・・・ん？」

二段ベッドの上の段にいる兄さんに声をかけた。返事は、どこか気のない声だった。

「絶対に、生け贄になんかなっちゃだめだよ。ボクたちは2人で旅をしてるんだから」

「・・・・・・・・・・ああ」

何秒もの沈黙が気になった。

そのあと、何を話しかけても返事は来なかった。

窓から見える月が、曇っているように見えた。

3, うそつき

次の日、目を覚ますと兄さんはいなかった。

『好きに町をうろついていてよし。また誘拐されんじゃねえぞ』

そういうメモだけ残されていた。

起きたばかりのときは大して問題視してなかったんだけど、町をうろうろしているうちに昨日のことを思い出した。

身震いがした。

ただただ兄さんを探して、町中を歩き回った。

いろんなお店に、新入りのバイトが入ったか聞いて回った。手当たり次第に人に聞いて回った

。体力のないボクは、しばらくするとすごくふくらはぎが痛くなった。

でも、休みたくなかった。休むくらいなら、一日中兄さんを探して回ってやる。

結局、昼ごろまで歩き回った。

兄さんの手がかりはまったく見つからなかった。

そのとき新聞配りの人の声が耳に飛び込んできた。

「魔女の生け贄が決定したよ！！この新聞は買わないと損だよー！」

生け贄が決定？

いやな予感が最高潮に達した。

「すみません！その新聞、いちぶください！」

そして、手渡された新聞の見出しには『西の峠の魔女 生け贄決定！』という見出しがついていた。

その下には大きな写真が載っている。

その写真を見た瞬間、ボクの頭の中は真っ白になった。

金色の混ざった茶髪。つりあがった琥珀色の目。よれよれの頭に巻いてあるターバン。

兄さんだった。

*☆☆

「逃げるんじゃないぞ。いいな？」

牢の出口に立っている鎧兵が、低い声で言った。

「・・・・・・・・ああ」

沈黙。

あーあ。やっぱ、判断間違えたかな？

なんていうか、また俺がボヤボヤしていたせいでシャラが誘拐されちゃった。だから、責任み

たいなのを感じていたっていうか・・・・・・・・。

あいつらに目をつけられていたら、どうなるか分からないから。あいつかが市長となんらかの関係でつながっていたとしたら、何かと理由をつけて憲兵団に逮捕させるかもしれない。旅が出来なくなるかもしれない。

そうなるくらいなら、あいつだけでも・・・・って思った。

・・・・・・・・なんて、深く考えた理由があるわけでもないんだけど。

意味もなく笑った。

ふと、窓の外を見た。

曇り始めた狭い空を、白い鳥が飛んでいた。

*☆☆

雨が降り始めた。

どす黒い雲から、小粒の雨が大量に降ってくる。

ボクは広場の時計塔の階段に腰掛けていた。

髪が、顔に張り付く。服がぬれて重い。

新聞の記事を見てから、頭が真っ白になって、フラフラと歩いていた。

気づくとこの時計塔に腰掛けていた。

雨が降っても帰らなかったのは、雨に当たれば何かが切り替わって、少しは気も晴れると思ったから。

だけど、今は雨の日と粒が顔に当たるのもうざったい。

帰ろうとしても、足に力が入らない。

そう、まるで・・・・・・・・

兄さんが探して迎えに来てくれるのを待っているみたいに。

目頭が熱くなった。ぶるぶると唇が震えた。

そうだ。

ボクは、兄さんのいない世界をまだ知らなかったんだ。

生まれたときから、兄さんはそばにいてくれた。

父さん達が出て行ったときも、泣いている僕をずっとそばで慰めて、「絶対にに見つけて、いっしょに帰ってこよう」って言ってくれた。

ボクには、兄さんしかいないじゃないか。

泣いた。

大きな声で泣いた。 今まで無いくらい、大きな声で。

あきらめることしか出来ないのか。

ボクにできることは、何も無いのか。

「っ！情けない・・・っ！！」

助けられて。支えられて。 そればっかりじゃないか、ボクは！

「あの・・・・・・・・」

ふりむくと、そこに立っていたのは青っぽい傘をさした、赤い髪に三つ綱の女の子だった。
あれ？この人、兄さんが助けに来てくれたときにそばにいたような・・・？

「あの人の弟さんですよね」

「・・・っ。そ・・・けどっ」

泣いてるもんだから、言葉が途切れ途切れになる。

「・・・？泣いてるんですか？」

「なっ・・・！泣いてなんかいいよっ！」

そうやって、無理にぬれた服で涙を拭こうとする。

雨がやんだ。

ちがった。女の子が、傘にいれてくれたんだ。

「・・・無茶じゃなくていいです。そばにいた人がいなくなって、泣かない人なんかいませんから」

夕焼けみたいな色の目が、こっちをまっすぐ見ていた。

「ほんとうに、このまま終わるんですか？」

「・・・どうしろって言うんだよ」

「助けるんです」

女の子は、即答した。

「なっ・・・。何言って・・・。無理に決まってるだろ！」

「なんでですか」

「そんなの・・・。ボクは弱いからだよ！！」

「それだけのことで、お兄さんを助けることをやめるんですか」

女の子は、ボクの返事に全て即答して言った。

そしてその女の子の放つ言葉達は、ボクの心にグサグサと突き刺さっていく。

「あなたのお兄さんは、何も省みずにあなたを助けに行きました。そのお兄さんを、見殺しにするんですか？」

「・・・・・・・・！！そんなわけないだろっ！！！！」

ボクの声が、だれもいない広場に響いた。

「ボクだって、兄さんを助けに行きたいよ！！ ずっと一緒にいた、ボクのたった一人の家族だ！！」

ボクが好き好んで、兄さんを見殺しにするわけ無いだろっ！！」
できる限り叫んだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・それだけの気持ちがあるなら・・・・・・・・・・、充分です」
へっ？

「手伝います。あなたのお兄さんを助けましょう」

「えっ……。兄さんを、助けてくれるの……？」

「何を聞いていたんですか。助けるのはあなたで、私は手伝うだけです」

は、はあ・・・・・・・・・・。

「えっと、じゃあ・・・・・・・・・・自己紹介させてよ。ボクはシャラ・ジナーフ です。きみは？」

「・・・・・・・・アミーラ・ヤークートです」

4, 魔女と生け贄

「こいつが生け贄かい？」

牢の外に続いている廊下の置くから声が聞こえてきた。

「はい」

鎧兵が答える。

「大人しくしてるかい？暴れたら大変だ……」

「大丈夫ですよ。大人しいです。連れてきてから、ほとんど口も利きませんよ」

頭を上げると、そこに立っていたのは30代前半ぐらいの女だった。

「……あんたが西の峠の魔女？」

「そうよ」

床につくぐらいの長くてまっすぐな黒髪に、何の飾りも無い長袖の黒いドレス。身に着けている宝石も、ぜんぶ真っ黒だ。

「どんだけ黒が好きなんだ、この人？」

「あなたが今回の生け贄ね？」

「見りゃ分かるだろ」

「そうね」

魔女はフッフ、と笑った。

気味の悪い女だな。

「あんたは何なんだ？なんで生け贄を必要とする？」

魔女はずっとニコニコ笑ってる。

「答えろよ」

ギロツと睨んでやった。

「フッフ。いやね、怖い顔」

また笑った。

「いいわよ、教えてあげる」

魔女は牢越しにしゃがんで、俺と視線を合わせた。

そして白い手を伸ばしてきて、俺の頬にスツとふれた。めちゃくちゃ冷たい手だった。鳥肌がたった。

「私はね、永遠に生きたいのよ」

魔女の黒い瞳が、キラリと冷たく光った。

「えっ……」

「生け贄の若い魂を使って、その生け贄が生きてきた分と、これから生きる分の時間を自分のものにする。つまり私の寿命が65歳だったとして、生け贄が100歳分の寿命を持っているなら、私とその100年を取り込んで165年間生きられることになるのよ」

「なっ……！」

なんつー恐ろしいこと考えてんだ、この人は。

「・・・・・・・・その、寿命をとられた生け贄のほうはどうなるんだ？」

魔女はニコッと笑った。

「もちろん、死ぬわよ」

えっ・・・・・・・・・・・・・・・・。

「まあ、明日には準備が出来るから。それまで、今まで生きてきた人生を振り返っておきなさい」

そうって、魔女は立ち上がって立ち去ろうと歩き始めた。

「あんた・・・・・・・・本名なんていうんだよ・・・・・・・・？」

「聞いてなんになるというの？」

「知り合った人には、名前聞かなきゃ落ち着かないんだよ」

魔女は、バカにするような、愚かに思うような目で俺を見てきた。

「・・・・・・・・アゲハよ。アゲハ・ヤミ」

そうって、また歩き出した。

*☆☆

「魔女は、峠をの中腹にアジトを構えているそうです」

アミーラは走りながらそう説明してくれた。

にしても、アミーラさんはすごく足が速い。アミーラはかけ足ぐらいのつもりなんだろうけど、ボクはヒイヒイ言いながら走っている。でも、まだスタミナはついたほうだ。兄さんを探し回ったので、少しは体力がついたらしい。

「あれです」

アミーラさんが指差した先には、とても大きな崖があった。

いや、崖にたくさんの穴が開いている。窓らしい。入り口では、鎧を着た人たちがながい槍を持って警備している。

やっぱ警備ぐらいついてますよね～。

「どうしようか、あの鎧兵・・・・・・・・」

「私が倒します」

アミーラさんは即答した。

「へっ？」

ボクの返事を待たずに、アミーラさんは飛び出していった。

いやいやいや。

いくらボクより年上でも、あの鎧兵をあの鎧兵を倒せるわけないって！！

でも、心配はいらなかった。

鎧兵の振り回した槍を、アミーラさんはヒョイツと身軽にかわした。そのあとに繰り出されて

くる攻撃も、次々とかわす。

そして隙を見て、アミーラさんは高く飛んだ。落ちてくると同時に、鎧兵の槍を蹴りで折ってしまった。

「す．．．すごい．．．．．」

ボクは啞然とした。

なにこの人。すごい脚力だ。

着地すると、槍を折られてあわてている鎧兵の腹に思いっきり蹴りを入れた。

すると、鎧がへこんでしまった。

鎧兵は倒れてしまった。

「もう大丈夫ですよ」

振り向くときになびいた2本の三つ編みと残りの長い髪はすごくきれいに見えた。

でも．．．．．。あんなのを見た後じゃ．．．、ねえ？

「あ．．．．．。えっと．．．．．。強いね」

「ありがとうございます。だって私、イウサールですから」

「えっ、イウサール!？」

聞いたことがある。っていうか、家にあった本で読んだことがある。

もっと西のほうに住んでいる部族で、赤い髪に赤だったりオレンジ色の瞳をしているんだって。その赤い髪を思い思いの三つ編みにする文化を持っているんだ。

そして、何よりもすごいのがその脚力。

大きめの岩でも、子どもならヒビを、大人なら粉々にできるそうで。

あー。納得しました。あの強靱な脚力の意味が。

「進みましょう」

一人で納得していると、アミーラさんはさっさと進もうとする。

「あっ。待って．．．．．」

ボクもあわててついていく。

中は、何メートルか置きに松明が置かれてあるんだけど、それでも薄暗かった。

どこからか、水の滴る音もする。いやな雰囲気だなあ．．．．．。

「!! お前たち、なぜこんなところにいる!？」

曲がり角のところで、鎧兵と鉢合わせた。

「警備のものがいただろう!? サボってたのか、あいつ!？」

一気にまくし立ててる。

よくあんな速さで話してかまないよね。

「いやいや。あいつはサボるような性格じゃないし．．．．．。もしかして倒．．．．．」

言い切る前に、アミーラさんが鎧兵のあごを蹴り上げた。

かぶとが吹き飛んで、鎧兵の人の顔が見えた。頭のハゲてるおじさんだった。

アミーラさんは男の人の胸ぐらをつかんで

「生け贄の捕らえられている場所を教えてください。でないと……」

「で……でないとどうなるってんだ？」

おじさんも負けじとにらみ返した。

アミーラさんは、足に力を入れて、床にビシビシビシッとヒビを入れて見せた。

「入り口の警備の方と同じ目にあわせますよ」

おじさんは青い顔になった。

関係ないボクまで立ちなおした。 怖いです。アミーラさん、怖いです。

「ろっ、牢に入れられている！この廊下の行き当たりの右にある階段を下りて、左に進め！そしたら牢に行ける！！

だから、命だけは助けてくれ～！！」

男の人がそう言うと、アミーラさんは手を離した。すると、男の人はすばやく廊下の奥へと逃げてしまった。

「行きましょうか」

は、はい……。

もうちょっとだからね、兄さん。 待ってて。

5, ディオル 脱走

夜が明けた。

魂を肉体からひっぺ返し、あの魔女の体に定着させる。

魂をとられた肉体は、朽ちるしかない。

死んでしまうんだ。

いやだ。

たしかに、自分で決めて生け贄になった。

でも。よく考えても見ろよ。

俺が死んだら？ シャラはどうなる？ 金は？ あいつは歳が足りないから、金も稼げない。旅もできない。親父とお袋にも会えない。

どうしたらいい？

手首と足首に、頑丈な枷がつけられている。窓も、顔の横幅くらいしかない。

逃げられない。

あーあ。俺もバカだよな。ほんと。

ろくな覚悟もないくせに、こんなことしてさ。ほんとバカだ。我ながら。

・・・・・・・・泣くだろうな、シャラ。昔から泣き虫だから。あいつ。

今思えば、いろんなことで泣かしたな。

たとえば。ちょっとしたことでケンカして、軽く頭を叩いただけなんだけど、痛かったらしく思いっきり泣き出してしまったんだ。それとか、ボードゲームをやっていて、3歳も違うから俺が勝つに決まっているのに、負けて泣き出したり。飼っていた犬の出産で、なんでかあいつが泣き始めて。

うん。あの泣いた理由だけは、今でも分からない。なんで関係ないあいつが泣くの？

・・・・・・・・・・。

楽しい人生だったなー・・・・・・・・。

ガシャッ、と枷の鎖を鳴らして座りなおした。石の床だから、座り心地が悪い。

「おい」

牢の外から、鎧兵が声をかけてきた。

「準備ができた。出る」

・・・・・・・・・・。

逃げられるかな。

分からない。可能性は少ない。こっちは枷をはめている。どちらかというとな不利だ。
でも、やらないよりマシだ。

「・・・・・・・・」

大人しく従うふりをして、外に出る。

「よし。じゃあ、この縄を・・・」

鎧兵が言い切る前に、思いっきり肩から体当たりする。

「うおっ・・・・・・・・」

倒れるまではいかなかったが、鎧兵はよろめいた。

今だ。

俺は、隙を逃さず走り出した。鎖がガシャガシャとうるさく音を立てる。

「なっ、待て！！おい、誰か！！生け贄が逃げたぞ。捕まえてくれ！！」

捕まってたまるかよっ・・・・・・・・！

足ははだしだ。それで医師の廊下を走っているから、ちょっと足の裏が痛い。

「止まれ！！」

目の前に、何人も鎧兵が立ちふさがる。

止まれっていわれて、止まる生け贄がいるかよっ！！

「どっ・・・・・・・・けええええええええ！！」

枷がついている言っても、開脚できるくらいの長さの鎖がついていて、完全に不自由ってわけじゃなかった。

体当たりしたり、蹴りを入れたり、できる限りの抵抗をしてやった。

でも、正直あまかった。

最後に道をふさいだ鎧兵に、回し蹴りを入れようとした。

でも、パシッと受け止められてしまった。（嘘だろっ・・・・・・・・）って思った瞬間には、足をつかまれて壁に叩きつけられた。

「っ・・・・・・・・！！」

そのまま俺は床に倒れた。ここまで強烈なのを食らったのは初めてだ。

「ちっ……。ガキ風情がなめやがって……。おい、さっさとこのガキ連れてくぞ」

腕をつかまれて、無理やり引きずられていく。鉄の冷たい鎧が、腕に食い込む。

力が入らない腕を動かして逃げようとする、別の鎧兵に腹をけられた。

「大人しくしといたほうがいいぞ」

そして、目の前に剣を突きつけられた。

もう抵抗する気力も体力も無く、ただただ引きずられていった。

連れてこられた場所は、とても広かった。大きなお屋敷が一見丸々入っちゃうくらいだと思う。

その部屋の中には、ところ狭しと分厚い本が積み上げられていた。なかには、巻物なんかも積み上げられている。机の上には、大きい羊皮紙が広げられていて、なにやら小さい文字が並んで

いた。真ん中には円の中にすごく細かい文字やら図形やらが描かれていた。でも、文字はこの国のものではなかった。

部屋の真ん中に引っ張ってこられ、いきなり手を離されたものだから、頭を床に打った。

床には、なにか大きな図形が描かれていた。もしかして、あの羊皮紙に描かれていたやつ？

「準備は整ったわ。はじめましょう」

アゲハがどこからか現れて、そう言った。

そして、手を交差に重ね合わせて前に突き出した。すると、なにかブツブツと呪文みたいなものを唱えだした。

アゲハが呪文を唱え終わると、床の図形が光りだした。

「・・・・・・・・っ！あゝっ・・・・・・・・！！」

呼吸が苦しくなってきた。全身に身を裂かれるような痛みが走る。

「あゝ ああああああっ・・・・・・・・！！」

死んでたまるか・・・・・・・・っ！！

そうは思うものの、痛みは激しさを増す。視界がゆがむ。ガハッ、と血をはいた。

「あゝ あゝ あゝ あゝ あゝ・・・・・・・・っ！！」

考えてみれば、魂と肉体を引き剥がすんだ。本来、2つそろって1つとして存在していなくてはいけないものを、無理やり離すんだから。想像を絶する痛みが走ってもおかしくないだろう。

。

「・・・・・・・・・・・・・・・・っ！！！！」

叫ぶこともままならなくなってきた。アゲハの嬉しそうな顔がちらりと見えた。

もうだめかもな。

生きることを諦めた。

そのときだった。

どこからか槍が飛んできて、術を行っている最中のアゲハの頬をかすめた。

思わず交差していた手をアゲハが引っ込めると、図形の光が消えた。それと同時に、俺の生き地獄も終わった。

「ぶはあっ！！」

ようやく深く呼吸できた。

意志の床に突き刺さったやりは、ここの鎧兵のものだった。

飛んできた方向を見ると、壁にいくつかあいている穴の中から、人が顔をのぞかせている。

どちらも、見たことのある顔だった。それどころか、片方は飽きるほど見慣れている顔だった。

。

栗色の髪、たれた海のような青い瞳。

「兄さんっ！！」

シャラだった。

6、救出

洞窟をだいぶ進んだところで、どこからか断末魔みたいな叫び声が聞こえてきた。

「あゝ あゝ あゝ あゝ ああああああ！！」

それは、ビリビリと空気を振るわせた。

「にっ、兄さんの声！？」

すごい叫び声だったけど、あのハスキーボイスは兄さんの声で間違いなかった。

「こっちから聞こえてきましたよ」

十何体目かの鎧兵を倒し、槍を2、3本手にしたアミーラさんは、壁の高いところにある穴を指差した。

「そうか！ どうやって行こう？」

あんな高いところ、どうやって登るの？

「まかせてください」

そういうと、アミーラさんは槍をボクに持たせると、ボクをひょいと担いだ。

「えっ、アミーラさん！？」

「行きますよ」

またしてもボクの言葉を無視して、アミーラさんは壁に向かって駆け出した。

ちょっとちょっとちょっと！！

このままじゃ壁に激突する . . . っ！

でも、アミーラさんは壁に勢いよく足を踏み込むと、そのまま壁を駆け上がり始めた！

「ふうおおおおおおおおあああああ！」

ヘンな叫び声が出た。

「お怪我はありませんでしたか？」

「は . . . はい」

やっぱり怖いですが、アミーラさん。

その穴の中を這って進んでいくと、出口に紫色の光が見えた。断末魔の叫び声は、そこから聞こえてきた。

より体勢を低くして、穴から少しだけ様子を伺った。

光る図形の真ん中に、だれかがうずくまっている。っていうか、悶え苦しんでいる。

「あゝ あゝ あゝ あゝ あゝ あゝ あゝ あゝ あゝ ！！」

. ！！

「兄さ っ！！」

叫びかけたところで、アミーラさんに口をふさがれた。振り向くと、自分の口の前に人差し指をたてている。「静かにしてください」って言っているんだろう。

(いきなり何叫ぼうとしてるんですか。見つかったらどうなさるんですか)

アミーラさんはコショコショ声で話しはじめた。

(じゃあ、どうするの！？このままじゃ、兄さんが……)

死んじゃうよ……！！

(じゃあ、こうしましょう)

そういうと、アミーラさんは槍を手を取った。

(え?)

そして、思いっきり反動をつけて術を発動させているらしき女の人めがけて、槍を投げた！！

(アミーラさんこそ何やってんですかああああ！)

槍は、女の人をかすめて地面に突き刺さった。 空気が凍りつく。

図形の光が消えた。 真ん中にうずくまっていた兄さんが、弱々しくこっちを見上げた。

大きく目を見開いて、「なんで来た」って顔でこっちを見てきた。

「行きますよ」

そういうと、アミーラさんは僕を担ぐと床をけった。その勢いで、地面にひびが入るのが見えた。

ヒュオオオオオオオオオオオッ！

かなりの高さから降りたはずなのに、着地はすごく静かだった。

「兄さん！」

ボクはアミーラさんの腕から降りると、図形の真ん中にいる兄さんに向かって駆け出した。

兄さんは疲れきっていた。大量の汗がでていて、口からは血が流れていた。

「バカ野郎……！……何で来たんだ……！」

兄さんは、せえせえと息を切らしながらボクをにらみつけた。

「俺は……兄貴なのに、お前を二度も危ない目にあわせて……。 だ
から……」

ボクと目を逸らした兄さんの目は、ボクの知っている強気ないつもの兄さんの目じゃなかった。すごく弱くて自信が無い、臆病者の目だった。

ボクの我慢の限界が来た。

「馬鹿なのは兄さんのほうだ！！」

ボクは叫んだ。

ボロボロと涙を流しながら。

「なんだよ、その理屈！！？ 兄貴だから！？罪滅ぼしのつもり！？ ボクは、こんなこと望んだ覚えはない！！！」

ぎょっとした顔で言葉を失っている兄さんに向かって、ボクは叫び続けた。

「絶対2人で父さんと母さんを見つけるって、約束しただろ！！？なのに……！」

自己犠牲なんて、単なる自己満足だっ！！！」

アミーラさんが、兄さんの足枷と手枷を踏み砕いた。

「あああああああ———ん……」

泣いた。助けられて良かった。嬉しかった。1人にならなくてよかった。

「・・・・・・・・・・」

泣き続けているボクを、兄さんはあっけにとられて見ていた。

「・・・・・・・・悪かった」

ギュッ、と兄さんはボクを抱きしめた。

「ごめん。怖かったよな。不安だったよな。かっこ悪くても、生きなくちゃいけないよな。死んだら、何もかもおしまいだもんな。・・・・・・・・本当にごめん」

静かに話し出した兄さんの言葉を、嗚咽をこらえながら聞いていた。

「もういなくなるらない？」

「うん」

「本当に？」

「うん」

沈黙。

「二人ともっ！感動の場面申し訳ありませんが、立ち上がって戦ってください！！」

アミーラさんが長い髪を振り乱して、そう叫んだ。

周りは、たくさんの鎧兵に囲まれていた。魔女を連れ出して逃がそうとしている奴も何人かいた。

何人かが剣や槍や鎖鎌を振りかざして、向かってきた。

「よし、じゃあ今度こそ罪滅ぼしに・・・・・・・・・・」

兄さんは槍を握り、立ち上がった。

目には、確かな光が宿っていた。

「行くぞ！！」